

試論の Ver. up のための検討その 1

R5.6.16 N.Miyamoto

(R5.7.12 誤記訂正及び追記)

1. はじめに

標記の試論を Ver. up するため、下記文献を糸口にして調査・検討を行ったのでこれを以下に記録する。

国立歴史民俗博物館研究報告 第 211 集 2018 年 3 月
弥生時代後期集落の消長よりみた古墳時代前期有力首長墓系譜出現の背景
 (なぜそこに古墳は築かれたのか) by 杉井建

この調査・検討で得られた結論は、次の通りである。

- ① 歴博報告は、考古資料から見て、「宇土半島基底部に前方後円墳が築造された背景にはヤマト政権の政治的な意図が働いている」と結論づけている。これは、崇神天皇や景行天皇が火国造を任命したという肥前風土記や日本書紀の記述で説明できる(考古資料と文献資料はマッチする)。
- ② 宇土半島基底部の前方後円墳の築造年代から、崇神天皇の活躍期は 285～300 年頃と推定できる。
- ③ 狗奴国は熊本県中北部にあった肥人のクニ、邪馬台国は筑後川流域にあった倭人のクニである。
- ④ 倭人-肥人-熊襲は本来、同系統の種族で、特に肥人は肥前・肥後にいた熊襲とみて差し支えない。
- ⑤ 邪馬台国本体が狗奴国に敗れることで邪馬台国連合は解体し、構成国(クニ)の多くはヤマト政権の傘下に移ったが、やがて狗奴国もなし崩し的にヤマト政権の傘下に入ったと推定される。

2. 歴博報告の要点抽出

(1) 地域圏と首長墓系譜との関係(都出比呂志/伊藤淳史)

都出説：① 竪穴式住居＝消費単位 → ② 世帯共同体＝数棟の竪穴式住居＝小経営の単位 → ③ 農業共同体＝複数の世帯共同体＝首長系譜の基礎単位 → ④ 大地域＝複数の農業共同体＝盟主的首長の母体

③は、同一水系にある世帯共同体が幾つか結びついたもの。古墳時代前期の首長は、その弥生時代中期・後期の農業共同体の領有圏の一単位継承している。

④は、各水系に対し 1 古墳と云うあらわれ方をする。

伊藤説：都出のいう盟主的首長は、農業共同体的紐帯を越えたより「広域的な集団関係の進展」の中で生み出される存在である。すなわち共同体の首長がより成長してそのまま空間的な支配を拡大するような存在ではなく、在地の領域経営に直接関係しない全く異なる次元で成立する位置にある。この伊藤説は淀川-木津川水系域の動向調査によっている。

ただ都出説と伊藤説は決して異なる訳ではない。何れも農業共同体のみならず大地域を越えたより大きな社会・政治動向のなか(より広域の政治的に選ばれた存在として)で盟主墳の動きを理解しようとする。

(2) 熊本県における弥生後期～古墳前期の集落動向と前方後円墳の築造動向の不連続性

弥生時代後期にきわめて優位な地域であった菊池川中流域などには有力な前期古墳は築造されず、相対的に劣位であった宇土半島基部地域に極めて有力な古墳前期の首長墓系譜が形成されたことが明確に示された。少なくとも熊本県地域では、弥生時代後期の拠点的大規模集落の領有圏がそのまま古墳時代前期の有力首長墓(前方後円墳)築造の基盤にはなっていないのである。すなわち、理想的な形で都出説は成立せず、伊藤説が再度確認された結果になる。『水田稲作に適した広い平野には強大な政治権力が育つ』

という生産力史観では説明できず。因みに熊本県の弥生後期遺跡の状況は次のようになっている。

菊池川中流域(菊鹿盆地・合志川域)＞熊本平野北部/東部＞その他(宇土半島基底部含め)

前方後円墳の築造が都出説に従うケースは多い(例えば群馬)。しかし、**地域を象徴する場所**あるいは**交通の要衝**に前方後円墳が築造される場合もある(日本列島の古墳がもつ重要な特性)つまり、**古墳が相当の政治性を帯びた存在であることを如実に物語る現象**が見られる。熊本県の場合も然り。つまり大和王権が外なる世界にその**勢威のフロンティア(ライン)**を示すため、**宇土半島基底部**で熊本における初期の前方後円墳の築造を**認めた(推した)**と考えられる。

(3)熊本県の前方後円墳の築造状況

290～350年→宇土半島基底部 [城ノ越古墳, 迫ノ上古墳, スリバチ山古墳, 天神山古墳, 弁天山古墳, 潤野3号墳, 御手水古墳, 向野田古墳(女性首長)、なお城ノ越古墳が最古]

340年以降→玉名平野部、390年以降→菊池川中流



前方後円墳の築造は、**畿内に形成された大和政権の勢威が熊本県有明海側に及んだこと**を意味する。



当時の中央政権は**中心一周辺関係の構築**を目指していたと思われるが、その目的を達成するため従来からの地域的枠組みを越えたところにおいて、各地域との新たな関係を結ぼうとしたのではないか？



熊本県の事例は、古墳が相当の政治性を帯びた存在であることを如実に物語る現象である。**多分、前方後円墳分布の周縁地域であるからこそ、熊本県地域においては、そうした古墳がもつ政治性が顕著に表れたともいえる**であろう。

更に云えば、**熊本県は北部九州の文化圏**にあり、宇土半島基底部を越えると北部九州的要素(青銅器器/甕棺など)が急激に低下するので、宇土半島は地勢上、北部九州的な弥生文化その南端(フロンティア)にあったと考えられる。然るに弥生時代の終末から古墳時代の初頭にかけて、熊本県地域では、**①甕の脚台が失われ、②銅鏡の分布状況が変化し、③鉄器生産が衰退し、④集落の再編が進んだ**。これらは全て**畿内地域にあった中央政権との係わり**という視点で説明できる。すなわち、

- ①甕の脚台消失は、近畿第V様式系統や庄内式系統、布留式系統の甕、あるいはそれらの影響を受けて丸底に変化した北部九州系在地甕の影響のもとに派生した。
- ②熊本県地域の三角縁神獣鏡が、それ以前の**銅鏡分布**の中心地域とは異なる場所にもたらされている点も、こうした列島規模での中国鏡分布の変化(北部九州優位から近畿優位に)につながる。
- ③福岡県博多遺跡群に**精錬鍛冶、鍛錬鍛冶**の一大中心地が成立することと相前後するかのようになり、熊本県地域での鍛冶活動は完全に衰退する。
- ④当時の中央政権は**中心・周辺関係の構築**を目指していたと思われるが、その目的を達成するため従来からの地域的枠組みを越えたところにおいて、各地域との新たな関係を取り結ぼうとして地域における**大胆な集落の再編**が行われた、熊本県の場合も然り。

3. 歴博報告を糸口にした議論

- (1) 杉井氏の議論は、淀川ー木津川流域の古墳分布について展開された伊藤氏の議論を引き継ぐもので、考古資料に基づく考察としては十分に妥当性があると思う。杉井氏の議論の根底には次のような認識がある。

- ・熊本県中北部(有明海沿岸部)は北部九州の弥生文化圏の延長にあること、
- ・熊本県南部(八代海沿岸部)は北部九州の弥生文化圏からかなり外れること

即ち、次のように南に向かって下り勾配となった弥生後期における文化的/社会的構造が存在している。

福岡県筑後川流域>熊本県中北部(菊池川/白川/緑川流域)>熊本県南部(氷川/球磨川流域)

この傾斜構造は主に考古資料から検知されるものである。ここで文献資料からこれら3つの連続した地域を捉えると、[邪馬台国(近畿/九州)ー狗奴国ー熊襲(国)] という政治的区分が浮上してくる。

以下、この仮説的な政治区分を用いて杉井氏の議論を、補填的に再考してみたい。なお、筑後川流域は九州説の場合、邪馬台国そのものとして扱い、近畿説の場合、邪馬台国の最も西端に位置する地方として扱うものとする。

(2) 魏志倭人伝の文脈では、狗奴国は邪馬台国の南に隣接するようなので、次の何れかになると思われる。

①熊本県のほぼ全域、②熊本県中北部のほぼ全域、③熊本県中北部のうち菊池川流域

これらはいずれも菊池川中流域(菊鹿盆地)を含んでおり、倭人伝にいう[その官に狗古智卑狗(クコチ彦)あり]につながる。菊池川中流域は、筑肥山地を介して筑後川流域の八女地方に接している。その流域には弥生後期～古墳前期の拠点集落である方保田東原遺跡など幾つかの環濠集落が存在しており熊本県内では最も弥生化したゾーンになる。そのため幾つかの農業共同体が結びついて、盟主的な首長(例えば狗奴国王)が生まれやすい地域になっている。しかし、倭人伝で云う7万余戸を有する邪馬台国に対し菊池川中流域だけでは対抗できず、狗奴国の領域は菊池川の全流域に広がっていたかもしれない(→③)。ただ、菊池川の下流域(玉名平野)は、有明海を介して筑後川下流域と政治的に連絡していた可能性があり、むしろ、南側の熊本平野の農業共同体に繋がって、熊本県の中北部のほぼ全域に狗奴国が広がっていた可能性の方が高い(→②)。更に云えば、八代海沿岸部から球磨川流域に拡がり熊襲を含めた大領域を支配して可能性もある(→①)。然るに八代海沿岸・球磨盆地の農業共同体が十分成熟していたとしても、熊襲を菊池川の中流域に結び付けるには余りにその離隔が大きいような気がする。ここでは②を採用し、**弥生後期における熊本県中北部の農業共同体に基盤を置いた政治的結合**をもって狗奴国と考えたい。

残念ながら熊本中北部を狗奴国に引き当てることが可能な考古資料はない。仮にこの地域が邪馬台国の一部であるとすれば、熊本県南部が狗奴国となる。しかし、熊本県南部は余りに狭隘であり、たとえば人吉盆地辺りに、幾つかの農業協同体からなり盟主的な首長によって統括されたクニが存在していたとは考えづらい。従って狗奴国の存在を熊本中北部に想定するのは妥当な選択ではないかと思う。

倭人伝によれば、3世紀半ば頃、狗奴国は邪馬台国と対立している。卑弥呼時代に限らず、両者は長期にわたって対立状態にあったのではないかと思われる。考古資料からは弥生後期に起きたこの抗争の痕跡は検出されていないようだが、弥生後期において熊本県の鉄鏃の出土量が福岡県に次いで多くなっているのは何か気になる⁽⁴⁾。鉄鏃が戦闘を制する要素になったとは言えないまでも、頸を長くできるなど石材や骨材に比べ加工が自在で、農閑期に行われ半分恒例化した戦さには適していたのではないかと思う。

なおここでは狗奴国人がいかなる種族であったかを考える。考古学で定説化しているように北部九州人は朝鮮半島南部からの渡来人が在来民を吸収して形成された弥生人(倭人)であったと思われるが、中部九州の熊本や、同じ北部九州でも佐賀や長崎にいた弥生人が、北部九州人と同じ由来を持っていたという確証はない。彼らは肥国人または肥人として区別されてもよい存在ではなかったかと思う。即ち

①筑前・筑後・豊前→倭人、 ②肥前・肥後→肥人

“肥人”は古い文献資料に散見され、5世紀頃の大和朝廷の人別の一種という説⁽²⁾もあるが、結果論的であまり賛同できない。ただ、倭人に由来する大和政権が、形式的に肥人を区別するのは決して不自然ではない。その区別は九州島へ到達するまでの経過の違いに由来すると思われる。恐らく彼らは江南にいた百越(族)の一部が、黄海から朝鮮半島あるいは東シナ海を經由して九州に渡来してきたもので、特に朝鮮半島に滞留して大陸の人文的な影響を受けた集団を倭人、比較的オリジナルに近い集団を肥人として区別したと思われる。本来、かれらは同じようなDNAや言葉を持っていたものの、弥生文化的にみれば、倭人>肥人であって、肥人は、大陸との交易ルートを握っていた倭人の後塵を拝する位置にいた。

ただ、後述するように肥人がヤマト政権のもとで倭人と一体化されると、わずかに万葉集のような文学表現や人別の中でたまに使用される以外は、肥人と云う識別用語は機能を失っていったようだ。

熊襲は、熊本県南部から日向・大隅にかけて蟠踞する肥人集団の呼称と思われる。縄文系との混淆度で違いがあるかもしれないが、熊襲イコール肥人と見なしてほぼ差し支えないと思う。熊本南部の熊襲と中北部の肥人の間に服属関係はなかったようだが、暗黙の同族意識があったはずだ。総じて熊襲は漁労や狩猟に長じた稲作・畑作農耕民に分類できると思う。隼人は熊襲の分派とみていいのではないかと…

風土記では熊襲を球磨噲と記しているので、クマを地名のように解する向きもあるが、個人的にはオリジナルの種族名ではないかと思う。菊池/熊本平野には隈府(クマの府)、隈本、隈の庄、託麻(田のクマ)など、クマを何かの識別のように扱った地名が見られる。

倭人・肥人の渡来について少し補足しておく。彼らの渡来経路はほぼ稲作伝来と重なる。稲作伝来でも江南から朝鮮半島を經由するルートと東シナ海を渡る直接ルートの二つが認められている⁽³⁾。後者については遣唐使の事例からわかるように非常に航海が難しいとされているが、漂流民の形も含めて直接ルートの蓋然性は十分あると思う。直接ルートによる稲の伝来は非常に古いと云われるので、朝鮮経由の稲作農耕が広がる前に、焼畑農法を伴って九州山地の河川沿いに拡がっていたのかも知れない。因みに直接ルートの痕跡は吉野ヶ里遺跡の墳墓の層築工法にも見られるという⁽⁴⁾。

(3) 杉井氏の結論は、“弥生後期において有意な農業共同体を持たない宇土半島基部に前方後円墳が出現する背景にはヤマト政権の政治的意図がある”ということだと思ふ。これと関連して想起されるのは、次の2つの文献資料である。

①肥前風土記にある建緒組説話：肥後益城の朝来名峰に集まり弥生民を脅かした土蜘蛛(縄文系)を討伐した建緒組を崇神天皇が初代の火国造に任命した。

②景行紀の九州巡幸説話：日向の熊襲の八十梟師と市乾鹿文を誅殺し、市鹿文を火国造に任命した。

宇土半島基底部に築造された前方後円墳は、城ノ越古墳以下9基である。注目すべきは向野田古墳である。この古墳は330年前後の築造で埋葬者は女性首長である。上記②の場合、火国造に任じられた市鹿文は熊襲の八十梟師の娘であるから、女性の古墳埋葬者が比較的レアということを考えれば、向野田古墳の被葬者は日向熊襲出身の市鹿文である可能性が高い。また①が崇神天皇の代で、②がその孫景行天皇の代とすれば、最も早く290~300年頃に築造された城ノ越古墳は、建緒組の墳墓である可能性が高い。すなわち、城ノ越古墳以下9基の前方後円墳は代々の火国造やその親族であった可能性が極めて高い。杉井氏の推論は文献資料の面からも妥当である。

ここで注目すべきは向野田古墳の被葬者・市鹿文が熊襲の出自であることである。もしこの地域が北部

九州の倭人勢力の土地であれば、熊襲を首長に据えることはあり得ないので、熊本県中北部が肥人(熊襲)の土地であったという推論は十分に成立し、**城ノ越古墳の被葬者・建緒組もまた熊襲**ということになる。

土蜘蛛が立てこもった朝来名峰は熊本平野東南部に位置するので、建緒組は熊本平野南端(→宇土半島基底部辺り)の有力首長と見られる。従って、280年頃には熊本平野の肥人共同体の中にヤマト政権の影響力が浸透してきたことになる。以下の議論のために整理してみると、

290～370年→宇土半島基底部において建緒組以下火国造に係る9基の前方後円墳の築造
 340～370年→菊池川下流の玉名平野において4基の前方後円墳の築造
 400～450年→菊池川中流域・合志川流域合志川流域において2基の前方後円墳の築造

玉名平野の築造は宇土半島基底部より約50年ほど遅れる。メインである菊池川中流域・合志川流域は約110年ほど遅れ、しかも築造数はわずか2件である。玉名平野は有明海を介して、宇土半島基底部とも肥前/筑後の沿岸部ともつながるので、その方面からヤマト政権の影響が入り込んだのかも知れない。一方、弥生後期に優位を示した菊池川中流域・合志川流域の遅れは著しい。ただ**拠点集落である方保田東原遺跡**は古墳時代前期(4世紀初頭)に入ってもあまり変化していない。この民生の安定は、この地の首長が政治的な破綻に至ることはなく、古墳時代に入ってもヤマト政権の下で勢力を保持できたことを暗示している。

全くの憶測ながらヤマト政権が熊本県中北部に影響を持ち始めた動機は、266年帯方郡から派遣された**張政が帰任した直後**、恐らく狗奴国が筑後川流域に攻め込み、邪馬台国(あるいはヤマト政権)と戦争状態になったことにあると思う。経緯や経過はともかく、**邪馬台国がそこで勝利した場合**、狗奴国は崩壊し、

①狗奴国の拠点集落(方保田東原遺跡)が破壊された(場合によっては破棄された)あとに、

②北部九州との一体化が進んで生産形態や文化形態に変化が起きる

と予想される。②については、確かに変化が見られる。博多湾周辺の奴国/伊都国などと繋がって大量の鉄製品が流入することで、それまで盛んだった鍛冶環境は次第に失われ、土器や銅器なども北部九州の影響を受けて変化している。しかし、①についてはその痕跡が殆ど見られない。方保田東原遺跡などの有力集落が破壊された気配はなく、古墳時代前期まで変化することなく継続しているようだ。

一方、**邪馬台国が敗退した場合**は、邪馬台国九州説と邪馬台国近畿説で少し結果が異なる。すなわち

①九州説の場合：邪馬台国を支えたクニ連合が解体し、多くのクニが、同系の倭人国家である初期ヤマト政権の傘下に逃げ込んだ

②近畿説の場合：クニ連合の保持のため、ヤマト政権から軍隊が派遣された

と思われる。しかし文献資料では、開化-崇神期に大和政権が熊襲討伐に動いた痕跡は見られないので邪馬台国近畿説による邪馬台国の敗退は疑わしくなる。以上の考察から、邪馬台国九州説を採り

①盟主国の邪馬台国が狗奴国に敗れたため、邪馬台国連合のクニグニはヤマト政権の傘下に移った

②やがて狗奴国と北部九州との一体化が進行して、狗奴国の生産形態や文化形態に変化が起きた

と考えたい。ただ①と②の間には飛躍がある。その飛躍は、「**狗奴国にはもともとヤマト政権に対して敵対意識はなく、他のクニに倣って、なし崩し的に強力な大和政権の傘下に入った**」ことで起きたと考えられる。またヤマト政権が熊襲ゆかりの日向から発生していること^(*)も、このなし崩しによる一体化を促したと思われる。恐らく狗奴国は、奴国など玄海灘沿岸国との流通を改善するため、障害になっていた邪馬台国の本体を排除したのだと思う。単純にクニ同士の局部戦争とみた方がいい。

(*) 文献資料によれば、ヤマト政権の原点である神武東征軍の主力は熊襲(久米)と思われる。

邪馬台国近畿説によるなら、弥生後期から古墳時代前期にかけての変化を狗奴国の敗退に由ることを主張し、崇神天皇による建緒組の火国造任命をその証拠と云うかも知れない。この主張は説得力がある。しかし狗奴国敗退を暗示するような考古資料がでていない。ここで、もし邪馬台国敗退を暗示するような考古資料があるならば、前述の筆者の推論は成立する。考古資料や地名あるいは装飾古墳の分布などに弥生末期に起きた”肥人の北部九州侵攻”の痕跡が残っているかも知れない、更に調査する必要がある。

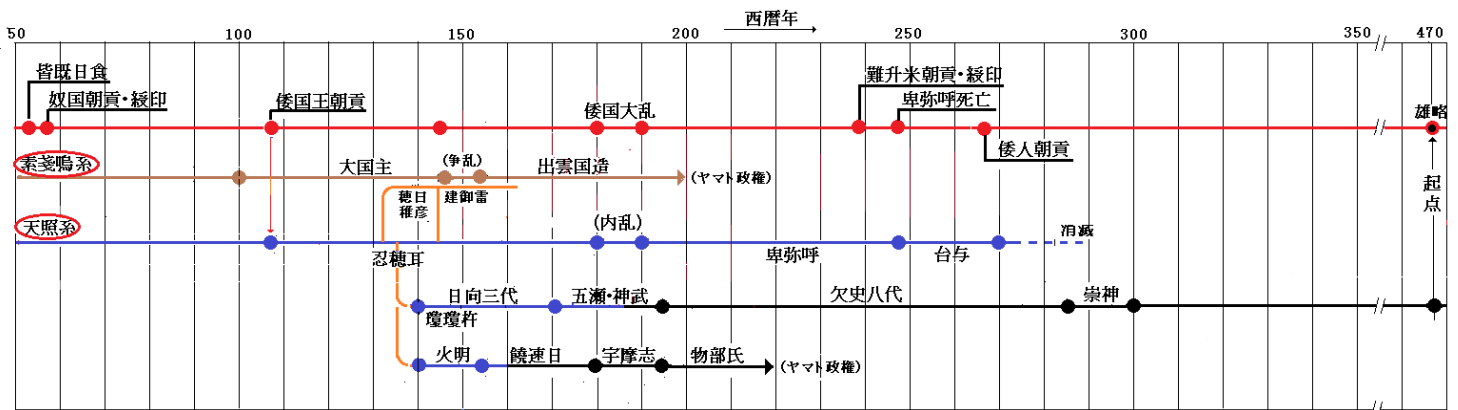
320年頃の景行天皇の九州巡幸では、狗奴国の存在は見えてこない。むしろ日向一球磨で熊襲の抵抗が起き、その絡みで熊襲出身の火国造が抜擢されているので、この時点では狗奴国はなし崩し的に消滅していたのかも知れない。しかし400年頃まで前方古円墳は築造されていないので、菊池川中流域や合志川流域の首長は、残念ながらまだヤマト政権からは認められず、その潜在的な軍事力を警戒されたのだろう。

なお九州行幸後のヤマトタケルや仲哀天皇の熊襲討伐は、**球磨地方や鹿児島地方の熊襲**に対するヤマト政権の対応を反映したもので、熊本県中北部は関係していないと思う。

(4) 以上の議論を年代的にまとめると次のようになる。

- 270年頃、狗奴国の侵攻によって邪馬台国連合が解体された（さらに調査すべき）
- 280年頃、崇神天皇により地元首長が最初の火国造に任命された(火の国は益城地方に限定?)
- 320年頃、景行天皇により熊襲出身の女性首長が火国造に任命された
- 290~350年の間、狗奴国はヤマト政権の傘下に入り自然消滅した

この推論によれば、[初期ヤマト王権の成立プロセスに関して]の図1の崇神天皇の活動時期は45年程度、繰り下げる必要がある。倭国大乱については現行と同様に倭国連合内部で起きた内乱とするが、要調査である(次回、議論したい)。下記に図1の変更案を示す。



崇神天皇活躍期が3世紀後半に繰り下げたことで、纏向遺跡に瑞かき宮跡が含まれることになる。**纏向は欠史八代—崇神の故地である可能性がある。**

(5) 余談になるが、魏志倭人伝の投馬国について多少調べたのでメモしておきたい。倭人伝には

南、投馬国に至る水行二十日。官を弥弥といい、副を弥弥那利という。五万戸あまり。

と記述がある。邪馬台国近畿説では、投馬国は備中の倉敷辺りにあると主張されている。南を東に読み替えると確かに水行のみで倉敷の上東遺跡辺りに到達できる。それはそれとして、南をそのままにして九州島の東岸を南下すれば日向灘沿岸部が候補にあがってくる。特に気になるのは

- ①西都市の旧妻町地区と都萬神社、
- ②一ノ瀬川河口域の下那珂遺跡、
- ③耳川と美々津港

“妻あるいは都萬”は音韻的に“投馬”を思わせる。西都市には著名な西都原古墳群があり、この辺りが古来から日向の中心であったことがうかがえる。西都市を流れる一ノ瀬川の河口には、下那珂遺跡など

弥生後期末のいくつかの高地性のある集落遺跡があり、往時の緊張感が感じられる。多少離れて延岡寄りに耳川が流れ、その河口に美々津港がある。地方首長を表わすミミの呼称が神武の子孫に多くみられ、伝説では神武東征軍がミミ津港から出立していることを考えれば、倭人伝にいうミミ/ミミナリは日向の耳川に由来している可能性がある。また国の規模として五万戸はいかにも大きい。筑後平野のようなまとまった平野のない日向灘沿岸では、沿岸沿い(例えば延岡～宮崎)に、各河川流域の農業共同体の連結が起きたのではないかと。また全くの憶測ではあるが、下那珂という地名は、倭の奴国(博多)の那珂川を連想させる。水行を介して玄界灘沿岸国と連携があったのではないだろうか？ また瓊瓊杵は奴国系の忍穂耳からこの細長い[投馬国の前身地]を譲渡されたのではないだろうか？ もう少し調べてみたい。

また[肥人の北部九州侵攻の痕跡]に関連してクマ地名を若干調べたのでその結果をメモしておく。九州界隈のクマのつく地名には次のような例がある。

福岡：筑紫野市隈、福岡市七隈/金の隈/田隈/月隈/干隈、大野城市雑餉隈、小郡市乙隈/山隈/横隈、飯塚市忠隈、那珂川市西隈、三井郡大刀洗町山隈、嘉麻郡桂川町吉隈、宗像市田熊、粕屋町大隈、久留米市京隈口/隈山公園/田主丸中尾(隈)/久留米市隈下/隈上川/丸隈山古墳群(5C 首長級)/隈城 嘉麻市熊が畑/牛隈/大隈、朝倉市隈江/小隈/山隈、行橋市下津熊/上津熊/中津熊、田川郡糸田町大熊、京都郡みやこ町大熊、浮羽町隈上、大牟田市田隈、
熊本：山鹿市熊入町、熊本市、菊池市隈府、城南町隈庄、託麻原、球磨郡
大分：日田市隈町/日隈城/三隈川(筑後川上流)、玖珠郡玖珠町大隈、大分県宇佐市隈/宮熊/江熊、
佐賀：佐賀市熊川、吉野ヶ里町松隈、唐津市熊原/熊の峰、
その他：長崎市手隈、宮崎市熊野、愛媛県久万高原など

柳田邦男は「地名の研究」で九州にはクマ地名が無数にあると言っている。一般に九州の中でも福岡が多いと云われ、久留米-小郡-大刀洗-朝倉、筑紫野-大野城-粕屋-博多、嘉麻-飯塚-田川-行橋の3系統があるようだ。大分の日田/玖珠も久留米-朝倉の延長と思われる。正確とは言えないが、分布傾向は

福岡 > 熊本 > 佐賀・大分 > 宮崎・鹿児島

ではないかと思う。一般にクマは“川の曲がった所(千曲川)/奥まった所/物陰/濃淡の境/陰翳/片田舎/辺鄙な場所/欠如あるいは辺境/周縁/神域を意味するといわれており土地の地形/形状に由るものが一般的ではないかと思う。しかしクマ的な地形は日本中どこでも見かけるので、熊のいない九州島にクマ地名が多いのは、単なる地形とは異なる何かが加算されたためではないか？ 個人的には[加算分のクマ]イコール肥人集団ではないかと思う。肥人はコマビトではなくクマビトと読むべきであって、前髪鉢巻きの風俗をもった男女を指す。もし弥生時代の福岡地方で肥人集団が一般的であったなら彼らを多く見かける場所を隈(熊)とは呼ばないだろう。おそらく古代の福岡地方では肥人集団は少数派で、肥人の住地が特定の場所として意識されていたのだと思う。この見方を更に九州全域に適用すると

熊本・佐賀・豊前 → 肥人集団は一般的な存在だったが、何らかの理由で識別する必要があった、
宮崎・鹿児島・豊後 → 肥人集団はごく一般的な存在で、殆ど識別対象にはならなかった、
九州島以外 → 愛媛/山口の一部を除き、殆ど肥人集団は存在しなかった

と推測できる。福岡における[加算分のクマ地名]は、

- ①先住していた肥人の住地を、後続の倭人が識別する、
- ②あるいは後続の肥人の住地を、先住していた倭人が識別する

ことで発生したものと考えられる。②の場合、[肥人の北部九州侵攻の痕跡]に繋がる。以上の件については[装飾古墳の分布]なども含めて、更に調べて検討していきたい。

更に、[纏向が欠史八代の故地である可能性]については、まだプレ的な調査段階であるが、清水の舞台

から飛び降りるつもりで、それは可能性大と言っておきたい。以下、メモランダム only

まず饒速日の東遷と神武の東征によって、強力な瀬戸内勢力が原初のヤマト政権に取込まれていったのは重要である。東征軍の3年/8年に及ぶ**吉備の長逗留**(Ex. 威圧による政治結合)は非常に意味のある出来事であって、7代孝霊/10代崇神による吉備討伐は、神武東征時の何らかの約定があったからこそ実施されたと考えられる。この吉備の長逗留を起点として、宮山・楯築の**祭祀システム(前方後円墳+特殊器台・弧文板など)**が纏向に定着していったと思う。

纏向遺跡で注目したいのは**~20棟の大型建築物**で、素人目ながら、これは宮殿と云うよりも遷宮を伴う祭祀施設 &/or 纏向の市的機能からくる設備ではなかったかと思われる。大量の桃の種は祭祀施設を暗示する。**確かに欠史八代は奈良南西部に偏るが、三輪氏や物部氏などとの結合を介して、奈良東南部の磯城地方と繋がっていた**と思う。因みに大王家はハプスブルグ家に似ていて、血縁的結合によって近畿廻りに支配を拡げていったと思う。このほかの注目点としては、

- ・畿内における鉄器不在現象→纏向が邪馬台国であれば起こりえない、
- ・対外関係の痕跡の欠如→朝貢の痕跡が見られず、北部九州の土器や大陸製の器物が寡少である、
- ・博多の比恵-那珂遺跡との類似性→奴国など沿岸諸国は初期ヤマト政権のルーツと思われる、
- ・外敵に対する緊張感が設備的にみて希薄である、
- ・戦時下にしては、箸墓はあまりに立派すぎることなど。

伝承による8代孝元/9代開化の陵墓は前方後円墳とされる(7代孝霊陵は山形)。特に孝元陵は纏向最古の前方後円墳と目される**石塚古墳**に近い時期に築造されているのでは？

周知のごとく津田史学の主張があっただけか、欠史八代を否定する声は大きい。しかし筆者は、欠史八代の空疎は源泉としての**帝辞/旧辞の喪失**によるものであって、時間としては厳然と存在したと思う。崇神期も含めて、もしその時間がなければ、ヤマト政権は東北北端にたどり着くことができなかったと思う。即ち、三輪族や物部族などを体質的に取り込み、皇女による祭祀や巫術によって民生の安定を得たことで、崇神以降のヤマト政権の膨張運動が顕在化したと思う。欠史八代は実にヤマト政権の存続にとって必須の時間ではなかったか？

更に各種資料あるいはレポートなどを調べて勉強してゆきたい。

引用文献：(1)「邪馬台国の遺物」 邪馬台国の会第249回記録

(2)歴史民俗博物館報告 232号(2022.3)「肥人についての再検討」柴田博子

(3)お米のはなし No. 14(2014.5.10) JAICAF

(4)「吉野ヶ里墳丘墓の構築技術のルーツと伝播」鬼塚・原 (土木学会論文集 Vol. 68 No. 4)

<要調査メモ>

①余りに唐突な纏向遺跡の登場：

纏向遺跡は、弥生末期に突如形成され1キロメートル余り4方の範囲に集住する大規模な集落である。

大阪平野の大規模な環濠集落に成長する遺跡→後期初めに急激に縮小

唐古鍵遺跡→後期になっても中核集落であり続けるが後期末になって一気に衰退、

それまでの奈良盆地の集落群が再編成され纏向遺跡と云う計画的な大規模集落が造成されている。

②纏向古墳群の築造の背景—築造年代、被葬者

③纏向遺跡検出の考古資料の背景—大溝の意味、建築物の意味、舶来品の寡少理由

- ④定型前方後円墳登場の背景：原型としての大型墳墓(備前宮山遺跡/楯築遺跡)
- ⑤前方後円墳の副葬品(円筒埴輪)：備前の影響(特殊器台/壺)
- ⑥定格前方後円墳の伝播
- ⑦畿内におけるクニ社会の実態→ 覇権争いの痕跡/初期王権の成立条件/連合体成立の可否
- ⑧銅鐸祭祀から古墳祭祀への移行→両祭祀の特性/移行理由
- ⑨青銅器から見る畿内弥生社会の推移
- ⑩西日本における鉄器事情 畿内の見えざる鉄器伝説→九州邪馬台国の隔絶で鉄素材入手のルート遮断か？
- ⑪土器から見た弥生社会の推移
- ⑫倭国大乱→葦原中国との関係、考古資料、争闘の痕跡、
- ⑬高地性集落の実態→葦原中国との関係
- ⑭饒速日の東遷→出自/畿内展開、内外物部族、星伝説
- ⑮投馬国の存在→ニニギの日向向問題
- ⑯備前勢力の実態→備前と大和の関係
- ⑰日向三代の実態→神武東征伝説、神武は誰と、日向三代の考古資料、縄文-熊襲-隼人
- ⑱山陰出雲王朝の実態→大国主伝説、葦原中国、建御名方伝説、山陰の考古資料